恋をしてはならない

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋をしてはならない

【Ｎコード】
Ｎ６５１５Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
三世紀のローマ帝国。この国ではキリスト教徒は他の宗教の者との結婚が許されていなかった。だがヴァレンティヌスは愛し合う若い二人をその命を賭けて結婚させ己は。あの一大イベントの元になったお話です。

第一章

恋をしてはならない

三世紀のローマの話である。

この時代キリスト教は激しい弾圧を受けていた。若し教徒とわかればそれだけで惨たらしい処刑を受けた。コロシアムでは連日夥しい数の教徒達が殺されていた。

多くは獣の餌にされ死んでいく。そうした時代だった。

だがその中でだ。教徒達は信仰を続けていた。ヴァレンティヌスもその一人だった。

彼は真面目なキリスト教徒であるだけでなく愛も持っていた。人を愛する気持ちに満ちそれを全ての者に向けていた。そうした人物だった。

信仰を隠していたがそれは確かであった。だがこの時代のローマはだ。

彼が生きるにはあまりにも辛い時代だった。信仰が禁じられていただけではない。

ローマはゲルマン人やペルシアといった外敵に悩まされその中も不穏な空気があった。内戦が度々起こってもいた。皇帝が武力で代わることすらあった。

その為軍の士気が重く見られていた。その中で皇帝であるクラウディウス二世が言った。

「兵士達の結婚を禁じる」

「それは何故でしょうか」

「結婚すれば愛する相手に目が向き士気が落ちる」

こう臣下に言うのだった。彼はこう考えていたのだ。

「だからだ。それは禁じる」

「兵士は独身でいよというのですね」

「その通りだ。いいな」

こうしてであった。彼は兵士達の結婚を禁じたのである。ヴァレンティヌスはそのことを聞いて深く嘆息した。そうして言うのであった。

「愛は誰にも止められぬもの」

彼の考えでもある。

「兵士だからといってそれを禁じるとは。何ということだ」

しかし皇帝の命令は絶対である。兵士達は結婚を禁じられた。だがその中でもだ。ヴァレンティヌスの思った通り誰かを愛した兵士がいた。

彼はその恋人とどうしても結婚したかった。だがそれは皇帝により禁じられている。それで彼は激しいジレンマに苛まれるようになったのだ。

そしてである。偶然であるがこの兵士はキリスト教徒でもあった。ヴァレンティヌスも知っている兵士であった。当然彼もそれを聞いてである。

その兵士に自分のところに来るように告げた。恋人と共にだ。

「私のところに来るといい」

「貴方のところにですか」

「その愛する相手と共に」

こう告げるのである。

「共に来るのだ」

「そうなのですか」

「だからだ。来るのだ」

また兵士に告げた。

「いいな、そうすれば救われるのだ」

「神によって」

「神は愛を否定したりはしない」

皇帝とは違う。そう言うのである。

「だからこそだ」

「はい、それでは」

こうしてであった。兵士はその恋人を連れてヴァレンティヌスの前に現われた。ヴァレンティヌスはその二人に対してこう告げたのであった。
「これから婚礼の儀式をはじめよう」
「えっ、しかし」
「それは」
「神が許される」
驚く二人にまた告げた。
「皇帝ではなく神がだ」
「神がですか」
「私達を許して下さるのですね」
「神が愛を否定されることはない」
ヴァレンティヌスの声は厳かなものだった。
「だからこそだ。婚礼も許されるのだ」
「では。私達は」
「いいのですね」
「そうだ。神が許される」
またこの言葉を出してみせた。

第二章

「それではだ。今よりカタコンベに行きだ」
「その場で、ですね」
「私達は」
「結ばれるのだ。愛によって」
地下の礼拝場に連れて行ってだ。そのうえで二人を結ばせた。彼等はこれで幸せを手に入れた。だがヴァレンティヌスはだ。
このことは何時しか皇帝の耳にも入った。結ばれた二人はそのまま手に手を取ってローマを後にした。ヴァレンティヌスはローマに残り信仰を続けていた。その彼がカタコンベで礼拝をしていた時にそのカタコンベを見つけた兵士達に捕まってだ。そのことも皇帝の耳に入ったのである。
それを聞いた皇帝は激怒した。そうしてであった。
直々にヴァレンティヌスを尋問してだ。左右の兵士達にそれぞれ両手を捕らえられている彼に問うのだった。跪かせられているとはいえその姿はあの主を思わせるものだった。
「何故兵士達の婚礼を許した」
「神が許されたからです」
捕らえられていてもだ。彼は毅然としていた。顔をあげて皇帝に答えたのである。
「だからこそです」
「私は許してはいない」
皇帝の声は明らかに怒っていた。
「皇帝である私はだ」
「ですが神は許されました」
ヴァレンティヌスはまだ言う。
「ですから」
「そう言うか。しかしローマの法は知っているな」

「はい」
「キリスト教徒は死刑だ」
まずはこのことを告げた。
「そしてそなたは私の命令に背いた。皇帝である私のな」
「ではそうされるといいでしょう」
「この男を処刑せよ」
皇帝は周りにいる兵士達に厳かに告げた。
「すぐにだ。よいな」
「はっ、それでは」
「すぐに」
こうしてヴァレンティヌスは連れて行かれた。だが彼は最後まで毅然としていた。そうして絞首刑にされるその時にだ。彼は言った。
「神は許される」
これが最後の言葉だった。こうして彼は殉教した。
そして今だ。日本という国ではだ。その日はまさに戦場だった。
お菓子屋ではだ。店員達がチョコレートを売るのに必死である。
次から次に様々な形のチョコレートを売っていく。黒いものだけでなく白いものもある。
その中でだ。店員達はこんな話をしていた。
「なあ、今日はな」
「バレンタインか？」
「何の日なんだ？そもそも」
一人がこのことを言うのだった。

第三章

「それでな。何の日なんだ？」
「アルカポネが対立するファミリーの連中を始末した日だろ」
別の一人が言った。
「その日だろ」
「いや、違うだろ」
だがそれはすぐに否定された。
「ほら、誰かが死んだ日だよ」
「誰かって？」
「名前は忘れたけれどな」
それは知らないというのだ。
「それでもな」
「誰か死んだのか」
「名前は知らないぞ」
またこのことを言うのだった。
「けれどそれでもな」
「死んだのは間違いないんだな」
「ああ、それは間違いない」
このことはしっかりと話される。死んだのは確実だと。
「処刑されたんだよ」
「随分酷い話だな」
「何でも結婚が許されない愛し合う二人を結婚させてな。それで処刑されたらしいな」
「酷い話だな、それはまた」
話を聞く店員はそれを聞いて述べた。
「本当にな」
「そう思うよ、俺も」
話す店員も同じ考えだった。その通りだというのだ。

「全くな」
「それでこの日はあれか」
バレンタインの話にもなった。
「愛し合う二人がチョコレートを」
「ああ、それでそうなったらしいな」
もっともこれはチョコレート業界がチョコレートを売る為にこじつけたものだとも言われている。だが真実は今はどうでもいいものであった。
「それでな」
「そうか、それでか」
「ああ、それでだ」
また話すその店員だった。
「チョコレートで愛し合う二人が結ばれる日になったんだよ」
「その人はそれで喜んでいるかな」
「喜んでいたらいいな」
少し考えながらの言葉だった。
「それでな。喜んでいてくれたらな」
「処刑されながらも愛し合う二人を結ばせたその人が今はチョコレートで結ばれるようになってか」
「時代は変わったよ。誰でも愛し合うことができて」
言葉がセンチメンタルになっていた。
「幸せになれるんだからな。チョコレートでな」
そのチョコレートは飛ぶ様に売れている。そしてそれを手渡す女の子と受け取る男の子の笑顔に満ちていた。それを空から見る者がいた。その顔は。
優しく微笑んでいた。いいものを見ている顔だった。その顔で幸せな恋人達を満足して見ているのだった。

恋をしてはならない　　完

2010.5.5

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6515o/

恋をしてはならない

2010年11月1日22時10分発行